

主文  
本件控訴を棄却する。  
当審における訴訟費用は被告人Aの負担とする。  
理 由

被告人両名の控訴趣意は末尾添附別紙（弁護士鈴木信雄同室伏礼二共同作成名義の控訴趣意書と題する書面）記載の通りであるがこれに対し当裁判所は左の通り判断する。

控訴趣意書第一点、の（一）について。

[illegible]

控訴趣意書第一点の（二）について。

然し乍ら記録によれば所論の主張自体によるも所論の所謂任意性については証人E同F同Gに対する原審における尋問応答の中で既にその取調を遂げているものと謂うべくHの所論供述調書は同人に対する原審の証人尋問における同人の供述内容自体によりその任意性を疑わしむるものがないことを推認し得るに充分であり敢て任意性につき特別の尋問を発するの要なきは事理の当然と謂わねばならない。而して刑事訴訟法第三百二十五条に「供述が任意にされたもの」と言っているのは強制拷問若しくは脅迫又はこれに類する程度の不当な事由によつてされた疑のない供述を謂い原判決挙示のEFGに対する検事の供述調書の供述が同人等の任意に出でたものでないとして原審公判廷において右三名が証言として述べた所論の如き事由は毫も任意性を疑わしむるに足る事由と為すに足りない。尚ほ所論は原判決が証拠に採用した右E外所論三名の検察官に対する各供述調書は刑事訴訟法第三百二十一条第一項第二号但し書により公判期日前における供述よりも信用すべき特別の事情の存することを確めらるべきであつたのを敢てこれをしなかつた違法があると云う趣旨の主張をしているけれども本件事犯の性質及び原審公判廷における所論各証人の兎角理路を欠く証言に鑑み右各供述調書は右証言により信用すべき特別の事情があるものと謂うことができる。論旨は孰れも理由がない。

控訴趣意書第一点の（三）について。

〈要旨〉然し乍ら刑事訴訟法第三百二十八条末段に「証拠とすることができる」と云うのは証拠及び証拠調に関する刑／要旨事訴訟法の諸規定の趣旨に照らし「方法としてこれを使用することかできる」と云う意味であつて有罪認定の証拠とすることができると云う意味ではないのみならず方法として使用することについてあらかじめ同条所定の書面又は供述の任意性につき取調を為すべき旨の別段の定めもないのであるからその取調を要すべき旨の論旨は亦これを採用するに由がない。

控訴趣意書第二点について。

所論の要旨は所論の如き証拠に徴し被告人Iの所為は被告人Aの原判示所為を幫助したにすぎないのであるから原審は事実の認定次いでは法令の適用を誤つたものでこの誤りは判決に影響を及ぼすことが明かであると謂うに帰するけれども原判決挙示の証拠を綜合考察するときは成程被告人兩名の加工程度に多少の逕庭のあることは認められるけれどもその共同正犯たることを疑うに足る事由あることを認め得ないその他記録を精査するも原判決に影響を及ぼすべき事実の誤認あるを認めることができない所論は理由がない。

控訴趣意書第三点について。

然れども記録によれば本作事犯の罪質態様等諸般の事情を綜合するときは所論の事由を以てするも原判決の量刑を不当とするを得ないのみならず原判決が衆議院議員選挙法第百三十七条第三項による同条第一項に所謂五年間選挙権及び被選挙権を有せざる旨の規定を適用しないとの宣告をしなかつたことを以て敢て批議すべき限りではない論旨又理由がない。

よつて所論は孰れもその理由がないから刑事訴訟法第三百九十六条に則り本件控訴はこれを棄却すべし当審における訴訟費用は向法第百八十一条第一項により被告人Aにおいて負担しなければならない。

よつて主文の通り判決する。

（裁判長判事 小中公毅 判事 細谷啓次郎 判事 河原徳治）